

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ⑬

2024年を締めくくると、その最後の当主が公広連載となった。今年は平安である。

貴族や藤原氏、とりわけ藤原道長を取り巻く人々が関心を集めていたように思

う。藤原氏は、その後の武家の世になっても、公家の最大勢力として権力の中枢を担い続けた。その中に、伊予と深く関わった一族がいる。

道長の叔父、公季に始まる閑院流に属する西園寺氏である。伊予の知行国主で、宇和荘なども領有したが、何より濃厚な結びつきは、南北朝時代に一族が下向し、室町・戦国時代に宇和郡で地域権力化したことである。伊予西園寺氏は、最終的に戦国乱世を生き抜き、豊臣の時代まで存続し

旧領主への敬慕伝える

る公広の坐像。現在は、同寺から徒歩で約10分と至近で、伊予西園寺氏のお膝元でもあり、浅からぬ縁がある当館で保管している。歴史上の人物肖像といえ、肖像画のイメージもある。伊予の戦国武将でも肖像画は何点が残されている

には、1867(慶応3)年、伊予西園寺氏は、1587(天正15)年に公広が没したことで、歴史から姿を消した。しかし、地元ではかつての領主として、今もお関心が寄せられ続けている。時代を超えた敬慕の念を伝える坐像ともいえよう(専門学芸員・山内治明)

年、宇和盆地の有志が作ら

せ、本拠黒瀬城のあった黒瀬山に祠(ほくら)を建て

て祀(まつ)り、黒瀬神社と称したとある。しかし、1936(昭和11)年に社殿

が老朽化したため、後西園寺公広卿記念会を設立し保

管したとある。幕末の地域住民の思いが推し量れる。

木像に和紙を貼り彩色。剝離や退色もあるが、水色の直衣(のうし)に白色であ

ろう指貫(さしぬき)を着用しているとみられる。

破損も多く、両手の位置が

上下にずれているのは笏(しゃく)を持つしぐさだが、笏は現存しない。冠の痕跡も残すが、髻(もとどり)にかぶせる巾子(こじ)や、後頭部の纓(えい)などは失われている。一方で、腰には太刀を携え、よく見ると胸と肩には京都の西園寺本家以来の家紋である三つ巴(どもえ)が金色であ

しらわれている。完成時は、さぞ鮮やかで見事な坐像だっただろう。

伊予西園寺氏は、1587(天正15)年に公広が没したことで、歴史から姿を消した。しかし、地元ではかつての領主として、今もお関心が寄せられ続けている。時代を超えた敬慕の念を伝える坐像ともいえよう(専門学芸員・山内治明)

本資料はテーマ展「西南四国の中世社会と公家」(2025年1月26日まで)で展示。

〈随時掲載します〉

西園寺公広坐像



西園寺公広坐像＝1867年、光教寺蔵、
県歴史文化博物館保管